

## 光旅抄

一

「このみちや行く人なしに秋の暮」

芭蕉ならずとも旅の心はわびしいものである。

人はみな旅人だどつくづく思われることである。

そして昔から覚めた人ほど寂しい旅人であった、

私もまた旅人である。

何のための旅なのか心に問うてみる。

すると私の心のおく底の声が

『それはたつた一人の人を求めているのである』という。

お前はもう長い旅をつづけているのにそれが見つかからないのかと問うと、

もうそのたつた一人の人に会った気もするし、まだ出会わない気もする。

私が旅を続けているのは、その一人の人に会いたいためであり、

私が微笑むことが出来るのは、

そのたつた一人の人に会った気がするからでもある。

二

近所となりによくには庭下駄をひっかけても行かれる。

百里の旅をするのにはそれ相当の足仕度が要る。

千里万里の旅に出るのにはその仕度がある。

長い旅、永遠の旅、永遠の旅人の心、仕度はいいか。

何もかもすてて、要らぬものの全てをすてて身軽になれ。

しかしどうしても無くても無くはならぬものだけを大事に身につけよ。

永遠の旅人でないと、この要るものと要らぬものとの選択が出来ない。

要らぬものをたくさん身につけて、要るものを忘れている。

永遠の旅人は少ない。

私はさびしい。

それは永遠の旅人の心にさめはじめたからだ。

しかし私は微笑む。

裁の足もとにはどこからかほのかな光がさしてくるからだ。

三

住みなれた関東の同侶をすて、京洛に帰る親鸞の心、  
奥の細道に哭く芭蕉の心  
ゲツセマネの園にたつた一人最後の祈りをささげるキリストの心  
嵩山すうざんの少林寺に逃げて面壁九年をはじめめる達磨の心、  
家をすててさすらうトルストイの心。  
さまざまな旅人たちが通つていつたであろうこの旅の悲しい心。  
だが、それではならぬ、やめてはならぬ。  
しかしいそいではならない。  
夜が明けきるのには間がある。  
虫が鳴く、美しい虫の声で道は埋もれている。  
空が少し明るくなりかけたようだ。  
あれを聞け、あの声を聞け、しきりに私をよんでいるではないか。  
あの声を聞くと急に私の足は軽くなる。  
永遠なるものの声。

四

足もとを見つめて歩け。  
私は毎日の旅にこのこと一つを自分に言いきかせている。  
私の旅に大事なことはこの事がたつた一つである。  
足もとを忘れたために傷をうけたり、  
毒虫にかまれたりして困ったことが度々ある。  
見よ一切の人が、一切の主義者が、  
誰も彼も足許を忘れては倒れてしまったではないか。  
全体主義が足許を忘れたら、個人主義が足許を忘れたら、  
共産主義が足許を忘れたら、何でも皆倒れてしまうのだ。  
足もとを忘れるのは鹿を逐おう猟師だけではない。  
お前の旅にはいつも悪魔がついている。  
名利の悪魔だ。  
足もとを忘れた時、お前はこの悪魔に誘われて小路に、迷路に入ってしまうのだ。  
足もとを見つめて歩け。いつまでも。

五

私は旅をしながら「不思議」な気がする。

せんじつめていえば、この不思議ということが私の旅に得たたった一つのことだ。裁のふむ道はこの「不思議」で満ちているといつてもいい。

何と不思議な道であることよ。

ふみしめればふみしめるだけ不思議である。

大きな坂が見えてくる。

しかしおくせずふむと坂は坂ながらに平地になるし、

平地だと思つていても、私の心に旅をあやぶむ心が出ると急に坂になつてしまう。

坂をいとう心が坂をつくり、

平地に執着する心が谷をつくる。

平気でしかも全身を打ち込んで歩めば坦々たる大道がつづいてゆく。

しかも私は多くの山坂や谷を越えなければならなかった。

私の心の台うてなのために。(闡提庵)